

反戦・非戦の人 陸の桜井・海の水野

桜井 忠温 水野 広徳

元松山市考古館長 大野 慶一
伊予史談会会員

一、はじめに

反戦の人、平和主義者として、桜井忠温・水野広徳はつとに有名である。

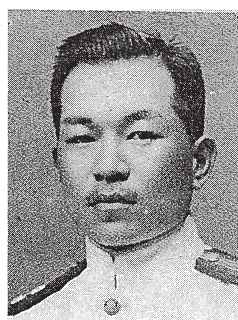
水野広徳は、桜井忠温と並べて反戦論者として言われる事をいやがったといわれている。しかし、この二人の軍人はともに戦争の悲惨さを世に知らしめた人として、とり上げない訳にはいかない。



軍人時代の桜井忠温

桜井は陸軍軍人として、水野は海軍軍人として、ともに同世代に活躍し、伊予の生んだ戦争否定の強硬論者であり、ともに近代戦記文豪者として正に双壁の存在である。この二人の歩み、足どりを辿ることにより、反戦の先覚者の生きざまを後世に伝えたいものである。

二、桜井忠温の人となり
桜井は、旧松山藩士桜井信之の三男として明治十二年（一八七九）、松山市小唐人町に生まれる。



軍人時代の水野広徳

幼少のころは、かなりの腕白大将として育った。

兄、彦一郎（鵬村）は英文学者として、将又、津田英学塾の創立者であり、弟、忠武は海軍中将であり、航空戦術の研究者として有名である。

明治二十五年ころ、十四歳の時兄にすすめられて、四条派の絵師松浦巖暉に入門したが、明治三十二年（一八九九）松山中学校卒業と同時に陸軍士官学校へ進み、松浦門を破門される。

明治三十五年（一九〇二）少尉に任官し、やがて日露戦争には松山歩兵二十二連隊の旗手として出征する。乃木第三軍に属し旅順の攻撃に参戦、東鶏冠山砲台を攻撃し連隊は壊滅、重傷を負う。

病院に収容され療養中、戦いのすさまじい体験をもとに不自由な左手で執筆したのが、かの有名な

戦記もの「肉弾」である。

明治三十九年（一九〇六）これが出版されると、各方面に多大の反響をよび、ベストセラーになる。千数百版を重ね世界的な記録となり、英訳をはじめ世界十六ヶ国語に翻訳された。アメリカ大統領は賞讃の書簡を寄せ、ドイツ皇帝は全軍将兵にこれを読ませたという。

明治天皇にも単独拝謁を仰せつけられ、一大光栄に浴した。「肉弾」は体験者の記録として「戦記もの原点」と評せられるに至った。

その後、陸軍経理学校生徒隊長や京都、小倉師団の高級副官などを歴任し、大正十三年（一九一四）陸軍省新聞班長となる。昭和三年（一九二八）には外遊し、同五年

陸軍少将で退役する。

三、桜井忠温の生きざま

退役後は気ままに筆を執り、「銃後」「煙幕」「草に祈る」「將軍乃木」「大将白川」等を著述し刊行する。彼は戦記もののみならず、余暇に絵筆をとり、仲々にすばらしい絵を描く、単に小説のみならず随筆、脚本も書き、「秩父の山は美し」の映画の脚本も書いている。戦後は自伝的小説「衰しきものの記録」を発表、著書四十余に及ぶ。

夫人に先立たれ、昭和三十四年（一九五九）一人旅疲れ切って帰郷、松山市山越「落葉村舎」で自適の生活を送る。

この「落葉村舎」での述懐として「画業を志して筆を捨て、文を愛してその域に達せず、戦場に臨んで寸功なく、死中再生恥多し、

戦友と共に死すべかりしものを、嗚呼あの日、あの時、生命は泥の如く腥風血雨の惨酷に泣けり、友よ安らかに眠れ、我また老いたり、東都にあること五十春、故山を慕うて帰る。旧蘆亡びて跡なく、友は多く世を去る。古城はひとり我を悲しむ。」を残している。



晩年の桜井忠温

彼は、軍人として、乃木大将を崇拜したが、現役の時代から軍人臭のない文化人として、趣味も広く、純情多感なヒューマニストであった。

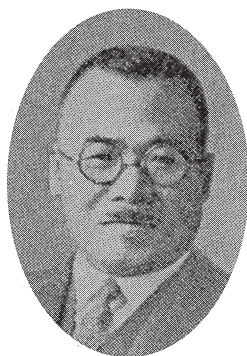
「肉弾」は戦争の残酷さを強調しているとして陸軍部内から迫害を受け、一時執筆を禁じられたこともある。ただ著書を一貫するものは温く哀しい人間愛と、徹底した平和への憧れであり、戦争を呪詛する平和主義であった。

道後鷺谷に「永眠の所」を定め昭和四十年（一九六五）九月十七日、八十七歳で死去。

四、水野広徳の人となり

水野は明治八年（一八七五）温泉郡三津浜で旧松山藩の下級武士水野光之助の二男として生まれた。

二歳のとき母が死去し、父とともに松山の北夷子町に移住した



晩年の水野広徳

が、父は広徳六歳のとき死去、兄と姉三人はそれぞれ親族に引きとられ、広徳も母方の叔父の笹井家に養われる。幼少で父母に死別し、つぶさに辛酸をなめる。

生来の乱暴者であつて、笹井家を追われた後、按摩をしていた兄光義方に身を寄せ貧困と戦いつつ愛媛県尋常中学校（松山中学）五年で中退し、再三挑戦して海軍兵学校に入學し、同二十一年に卒業。

中学校では、内子出身の高橋竜太郎（後の通産大臣）と同級であつた。兵学校入學でも、年齢をごま化し、不屈の精神でもって初志の目的を達した。明治三十三年（一九〇〇）海軍少尉に任官し日露戦争には大尉として、第四一号水雷艇長となり、旅順港閉塞戦や日本海海戦に参加して、同三十九年には東郷司令長官より感状を授与されている。後、海軍軍令部に出仕し、「日露戦争海戦史」の編集に当たる。その余暇を利用して、海戦記「此一戦」を執筆し、明治四十四年（一九一〇）出版、陸の「肉弾」として一躍文名を高める。

同四十二年以降、第十六艦隊司令や佐世保海軍工廠検査官、海軍省文庫主管を歴任する。

当時の水野は軍国主義の信仰者であり、帝国主義の讚美者であつた。大正二年（一九一三）友人の困っているのを救うために、日米戦争仮想記「次の一戦」を一海軍中佐という匿名で出版発表をする。その中に外交の機微にふれる箇所があり、海軍部内で問題となる。しかも無認可出版のところが謹慎を命ぜられ、本は絶版となる。大正三年（一九一四）許可を得て「戦影」旅順海戦私記を発売したが、あまり売れなかつたらしい。

大正四年以降「出雲」「肥前」の副長を歴任し、大正五年（一九一六）私費留学で、イギリス、フランス、イタリア各国を視察し、大正七年海軍大佐に昇進する。この私費留学中、北仏戦跡や敗戦国ドイツの惨状を視て、戦争の惨禍害悪を痛感し、彼の思想に大きな変化をもたらした。帰朝後、再び軍令部へ出仕し、海軍省文庫主管を務めるかたわら、中央公論などに軍国主義的論調の評論を書き続けた。

五、水野の思想転換

大正八年（一九一九）から九年まで、二度目の欧州私費留学を行い、第一次大戦後のフランス戦跡、ドイツ国内の惨状をつぶさに視察し、戦争の幻滅さを確認するとともに彼自身の戦争論思想に大きな影響を与える。今日で言うカルチャーショックであつた。帰朝後、軍令部に出仕するかたわら、新聞紙上に「軍人心理」を書くが、現役軍人の筆として露骨に過ぎるとして、謹慎処分を受ける。

この頃より水野は「軍隊はもはや永住の地に非ず」と決意して、大正十年（一九二二）現役を退く。そうして野に下り、剣を筆に代え軍事評論家、文明批評家として再出発をし健筆をふるう。

六、水野広徳の生きざま

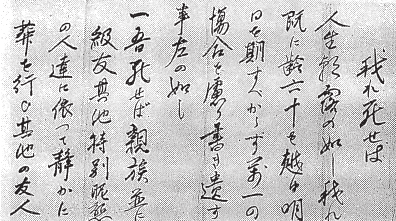
大正十三年（一九二四）中央公論に「新国防方針の解剖」を発表。日米戦争を想定した当局の新国防方針を徹底的に批判し、日米戦わば勝算なく、断じて戦うべからずと憂国の熱情ほとばしる大論文で国内世論を刺激し、米国にも大きな反響を与えた。

大正十四年（一九二五）米国海軍大演習に際して、「米国海軍の太平洋大演習を中心として」（日米両国民に告ぐ）を中央公論に発表。その後は「戦争と軍備問題」「無産階級と国防問題」等の反戦、平和思想を大胆率直に述べる著作を発表する。しかし、これらの理論著作は当局によって危険視せられ発禁処分や、新聞、雑誌社が圧迫された。昭和七年（一九三二）日米戦争仮想物語「興亡の此一戦」を出版したが、日米戦うべからずの不戦論として発表が禁止される。

昭和十二年（一九三七）「日本名將論」を出版せんとしたが、これまた当局の監視きびしく執筆不能となつた。当時の水野の心境は、
「国を憂い、世を慨くとど何かせんたゞ成るようになれとぞ思う」
昭和二十年（一九四五）東京の戦災と敗戦を予言して、越智郡大島の津倉村本庄に疎開し、終戦を

迎える。
その間、一人息子の光徳は八月十二日、フィリッピンで戦死、水野は期待した息子に先立たれ、それを知らなかったに違いない、同年十月腸閉塞をおこし、今治で入院したが、七十一歳で死去。
辞世の句に
かえりみれば崎岬羊腸の七〇年
虫の如く生き、草の如く枯る
これは中之川通りの蓮福寺の墓に刻まれている。
帝国主義にNOといった軍人であり知己を待たなん百年の後の人であつた。
正宗寺の碑には、
世にこびず人におもねらず
我はわが正しと思ふ道をすすまむ
また昭和二十年八月に松下芳男氏の手紙には、
自らを島守と称して「国守る務忘れて軍人が政治を弄し国遂に破る」と書いている。

非武装平和論、人道的平和主義の水野広徳の面目躍如たるものがある。



水野広徳の遺書(昭和18年)

参考文献

- 一、明治百年愛媛の先覚者たち（愛媛県教育委員会）
- 二、愛媛県史、人物編（愛媛県）
- 三、桜井忠温・水野広徳
- 三、水野広徳著作集（全八巻）

雄山閣出版